

平成6年度 校内研修・個人研修の歩み

校訓

天資養活
自他共栄

の具現

砺波市立出町中学校

なぜ学び方を身につける学習なのか？

～子どもを育てる、子どもを変革する～

「やる気」とはなにものか？

ここに「やる気を育てる」（十東文男、宮本裕子共編）という本がある。それには、やる気をどう育てるか詳しく述べてあるが、その中の次のような一節が目をついた。

やる気の強い人は、長期にわたる目標達成、あるいは将来の目標への展望を持っているが、やる気の弱い人には、それが乏しい。

主体的になるとは、やる気になることである。「わかる授業」と、生徒が主体的になること（やる気になること）は、切っても切り放せない関係にある。

最近、大きな問題となっているアイデンティティがもてない生徒や、中途半端で逃避的傾向にある生徒たちが、どう「やる気」になるかは、達成動機（積極的な行動を促すやる気）づけと、目標への展望の持ち方が鍵になる。

では、具体的に日々の授業で生徒が「やる気」になるために、そして「わかる授業」をするためには、どんな要素が必要なのだろうか？

弱点を知ることは、わかる授業への第一歩

我々は、まず教師の姿勢を改めることが第一と考えた。有田和正氏は、「教師の弱点」について、次のように述べている。

最近になってどうして「個性化教育」などということが叫ばれるようになったのであろうか。それは「目標」の考え方が、どうしても改められないからだ、といえる。

つまりどの子どもにも、「これを教え、わからせなくてはならない」という、内容中心、教材中心、教科書中心の考え方・姿勢が教師に強く、これから抜け出せないからである。

この子どもをどう育てるか考える前に、「これをどう教えるか」と考えてしまい、子どもを変革するところへ考えが及ばない。

どうしても子どもを見て考える前に、教科書を見て考えてしまう。しかも、どの子にも同じ内容を、

同じ程度にわからせるのが教師の仕事だと考える。私は、いかに意見が拮抗するようにするかという工夫している。意見の拮抗は、一斉授業をダイナミックにし、一人一人の考えを個性的にする。
「現代教育科学」32号

この「意見の拮抗」を多面的にとらえてみよう。実は、この要素は、相手がいって、自分がいるということである。言うまでもないが、教師から与えられる one-way（一方通行）のものではなく、互いにやりとりがある two-ways という要因があるということに着目しなくてはならない。教科書の内容をどう教えるかは、線（連続）ではなく、点（断続）の取り組みである。これでは、生徒の姿が見えてこない。適切な評価もできない。

ツー・ウェイの授業を仕組む！

本校では、「受け身の授業」から、「自ら調べ、学ぼうとする授業」への転換を図ろうと、昨年度より意識を喚起するための条件を分析したり、「学び方を身につける学習」を推進したりしてきた。

全ての教科で、指定単元をもうけ、生徒が中心の活動を位置づけた。特に「体験学習、調べ学習、発表、作品作り」などを通して、一人一人の個性に焦点をあてようとした。

また、日々の授業では、「小さくても、1年間継続してできるものを！」という呼びかけで、教師たちはそれぞれに、自分の一番興味のある（他律ではなく自律）テーマを選んで、取り組んだ。

表現力を育てるために、ノート指導に地道に取り組んだ教師。わかる授業を徹底しようと板書や発問を工夫した教師。年間を通して、授業の最後に次時の予告をし続けた教師など、その取り組みは実に多種多様である。

小さな成果の分析が大河実践を生む！

結果は、それぞれの報告に克明に記されている。ことわっておくが、それらの報告は大河実践ではなく、日々の取り組みからわかった、ほんの些細なことが中心に書かれている。しかし、小さな成果を分析し、その成功条件を積み上げることが大河実践につながる。

大切なのは、誰でもできるという法則や、今後の指導にプラスになる観点を見つけようという姿勢である。もちろん、失敗もある。しかし、失敗を恐れては前に進まない。失敗を堂々と書き、こういう教訓を得たと書いている教師の努力を評価し、明日の授業に期待したい。

生徒の評価を生かしてわかる授業を

さて、来年度につなげるための貴重な財産がここにある。これらは、今年頑張った教師たちへのプレゼントとして、生徒がくれたものである。

今年1年間の授業で特に印象に残ったものを、各教科で1つあげ、それらの授業に共通することは何かを、自分なりに考えてみて下さい。
(3学期に生徒たちにとってアンケートより)

- 目標（作品を仕上げるとか発表するとか）があったこと。
- 課題解決のために、自分で自由にできる時間があったこと。
- 与えられたものではなく、自分が興味を持っていたことだったこと。
- 先生に全部教えてもらうのではなく、自分たちで自主的に教えあったり、調べたりしたこと。
(やらされているという感じがしなかったこと。)
- 教科書通りの授業ではなく、変わったことをしたこと。
- 刺激を受けたこと。
- 特に5教科の場合、先生の話聞くだけでなく、楽しくなる作業があったので集中できたし、やりがいがあったこと。
- みんなの意見を知ることができたこと。
- ちょっと苦勞するような内容だったから、できた後すごくうれしかったこと。 など

これらの回答に、これからの取り組みの大きなヒントが隠されているような気がする。生徒が生き生きとする授業には、下線部のような要素が不可欠なのではないかということである。これらの法則は、どの単元でも生かすことができる。年間、たくさんのわくわくする授業をそしてわかる授業を仕組むことができる。

生徒が生き生きとする授業の要素とは？

遅々とした取り組みではあったが、それぞれの実践の中からわかったことを組み合わせてみると、次のようなことがいえるような気がする。

- 生徒は課題を達成することが、自分にとって意味や価値があると感じた時にやる気になる。
- 目標を達成するためには、「わり」(手がかり)や見通しを持つことが必要である。
- やる気が生まれるためには、目標に到達するための手段や方法などの過程をイメージとして持てるのが、必要になる。
- 「やり抜く」イメージを持つためには、過去の経験が大きな要因になる。
- 何の呪縛も制約も受けない時は、目を輝かせて取り組む。
- 生徒たちの発言やノートやレポートなどの意見を取り上げることで、生徒はより授業に主体的に取り組むようになる。
- 課題追求が終わった時に、何がわかったのか、何ができるようになったのかを明らかにしておくこと、やる気が生まれやすい。

おわりに

よく、中学校の教師は自分のテリトリー（教科の専門性）を盾に、「自分の教科では…」ということを行いがちであるという指摘を受ける。教科の枠を超えて、「子どもを育てる」という立場で接すれば、新しい見方や指導法が得られるはずである。そのセンスを磨くことが、プロの教師としての第一歩なのかもしれない。

この実践記録は自由な形式で書かれており、個性豊かな表現が満ちあふれている。この個性が個性的な生徒を育てると信じている。NHKの幼児番組の歌のおねえさんを目指していた教師、新聞記者になっていたかもしれない教師、アナウンサーになりたかった教師、コンピュータ・プログラマーにあこがれていた教師、などなど、実に多彩な顔ぶれが、それぞれの持ち味を十二分に生かして書いている。なかなか楽しい読み物になっていると思うのだが、読者のみなさんはどうお考えになるだろうか。ぜひ知りたいものである。

目次

○ 巻頭言	1
○ 総論「なぜ学び方を身につける学習なのか」	2 ~ 3
○ 目次	4 ~ 5
国語科	
○国語科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方	6
・習うより慣れよ	7 ~ 8
・学びがいのある国語の授業をめざし	9 ~ 10
・自分らしいノートづくり	11 ~ 12
・短歌づくりを楽しむ生徒に	13 ~ 14
・よし、書いてみよう！書けたぞ！もっと書いてみたいなあ とやる気の出る授業とは...	15 ~ 16
社会科	
○社会科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方	17
・課題学習における生徒の問題意識とは	18 ~ 19
・知識の量に左右されない『予想』の立て方	20 ~ 21
・「やってみよう！行ってみよう！」教科書・教室脱出作戦	22 ~ 23
数学科	
○数学科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方	24
・エキサイティングな数学の授業	25 ~ 26
・「嫌い」にさせない授業をめざして	27 ~ 28
・どんな課題を設定するかが数学の生命線	29 ~ 30
理科	
○理科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方	31
・楽しい理科を目指して～「身の程知らず」を育てよう	32 ~ 33
・「僕らが解決したんだ」という充実感を求めて	34 ~ 35
・やる気のでる理科学習はどうあればよいか	36 ~ 37
<特殊学級経営>	38 ~ 39
・「一人っ子が4人」から「4人兄弟」に	

英語科

- 英語科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方
- ・表現力を高めるノート指導のあり方
- ・コミュニケーションはピンポンのように
- ・英詩がいざなう言葉の世界
- ・自分だけのオリジナルノートを作ろう

音楽科

- 音楽科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方
- ・「できた」「やってみたい」そんな声が聞きたい
- ・自主練には“練習計画”もあるぞ！

美術科

- 美術科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方
- ・制作ノートで「美術」に興味を
- ・これがあってこそ、表現したいと思うもの

保健体育科

- 保健体育科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方
- ・勝つために、皆が知恵を出し合って練習に取り組む授業を目指して
- ・学習カードは福の紙
- ・自分達が作る練習計画が最高...練習が好き
- ・育てます「挑戦する人！」応援します

技術家庭科

- 技術家庭科における「学び方を身につける学習」の基本的な考え方
- ・電気にもしびれない。自分で発見、自分で解決
- ・「書く」って無駄なこと？！
- ・大きな実、なあれ

○終わりに

40

41 ~ 42

43 ~ 44

45 ~ 46

47 ~ 48

49

50 ~ 51

52 ~ 53

54

55 ~ 56

57 ~ 58

59

60 ~ 61

62 ~ 63

64 ~ 65

66 ~ 67

68

69 ~ 70

71 ~ 72

73 ~ 74

75

平成10年度 校内研修・個人研修の歩み

校訓

天資養活
自他共栄

の具現



2年社会科授業（壁台学習）より

富山県 砺波市立 出町中学校

Let's go "GLOCAL".

授業は グローバルに

英語科 中嶋 洋一

1 はじめに

全身が震えるようなショックだった。思わず、今までの自分の授業は、一体何だったのだろうと考えてしまった。

今夏、カナダのピクトリア大学で行われたグローバル教育セミナーに参加し、21世紀の学習はこれだ！と痛感した。

今の教科の学習はピリヤードの球のような関係だ。それぞれの教科が独立して、エゴを主張し合っている。これからは、それらをWeb（クモの巣）のように絡み合わせる必要がある。

グローバル教育は、平和問題、人権問題、ジェンダー問題、動物虐待問題、環境問題、開発教育問題などを、関連づけて学んでいく優れた手法である。

ちょうどサイコロの目のようなものだ。出目も残りの目も一体なのである。

日本の教育では、いじめならいじめだけを指導する。しかし、いじめの奥には男女差別、動物虐待、人種差別、開発教育、環境問題の要素をも含んでいることが多い。一面的な指導では知恵(working knowledge)にはなりにくい。

また、グローバル教育では、互いに気づき、学び合うリフレクションの学習が確保されている。

頭からこうだと教えない。みんなで考えているうちに、「あれ？どうも違うぞ」という思いが生まれてくる。そこから学びやリサーチの必要性が出てくる。

このように、一人ひとりの気づきが大切にされると、セルフ・エスティーム（自己肯定感・自尊感情）が高まっていく。

私が取り組んでいる「～したくなる」教材の開発も、この気づきが大きな要素になる。自ら気づき、心が動かないと、自らしたいという気持ちにはなれない。

私は、当初の仮説を夏休み以降のように修正し、心から学びたくなる教材の開発や教師の発問について研究を推進した。

2 研究主題

「～したくなる」教材の開発と発問の工夫はどうあればよいか

3 研究仮説

- (1) 驚きや感動など、心が動くような教材を用意すれば、自ら書きたい、話したいと願うようになるのではないか。
- (2) 友だちとの関わりを意図的に作り、気づきが生まれるようにすれば、自己肯定感が高まり、もっと書きたい、もっと話したいと願うようになるのではないか。

4 研究方法

- ・ 授業と授業後の感想を通して検証。
- ・ 各種研究大会での評価。

5 研究の結果と考察

(1) 仮説1の検証でわかったこと

・ 意図的にギャップを作り出せば、驚きが生まれ、生き生きと学ぶようになる。

【事例1】

ネパールを題材として、グローバル教育（開発教育）に取り組む。ネパールは、成人識字率が世界で下から3番目の国である。

まず、水を入れたコップを3つ用意する。コップには、紙にネパール語で「水」「酒」「毒」と書いて貼ってある。

(英語で)今日は暑いので、水を用意しました。ただ、この中には毒の入ったコップが1つ、酒が入ったコップが1つ混ざっています。

「えーっ!そんなの、わかんないよ〜」

そこで、ネパールの成人識字率が男性41%女性14%というデータ(UNDP)を見せる。

「えっ!?!そんな、恐ろしい……」

子どもたちは信じられない様子だ。と同時に、ネパールではどんな教育をしているんだろうと知りたくなっていく。

次は場所の確認だ。アジア地図(掛け図)でネパールを確認する。ヒマラヤの麓で山岳地帯だ。クイズで世界中の国旗の中からネパールの国旗を探す。ネパールだけが三角形なのである。

異文化理解の資料「ネパール」のプリントを配る。子どもたちは、もう知りたくてうずうずしている。最後にだめ押しをする。

"What time do you usually get up?"

In Nepal, people get up at five."

「え〜っ!?!」

こんなことがたくさん書いてあります。資料を読んでいて、驚いたところがあればそ

こを蛍光ペンで塗りなさい。どれだけ見つかるかな。時間は5分。はじめ!

生徒は無言で英文を読み始める。そのうちに、蛍光ペンのキュッ、キュッという音が静かな教室に響くようになる。

読み終わった後は、ペアでお互いにわかったことを相手に英語で伝える。

最後はディベートで仕上げた。

"Which is better, Japan or Nepal?"

テストや宿題がなく、最後に国家試験(合格しないと進級できない)があるネパール。音楽、体育、部活動がない。

生徒の心は揺れる。

二人でジャンケンをして、サイドを決めてディベート開始。教室が騒然となる。話したいことが山ほど出てくるからだ。

(2) 仮説2の検証でわかったこと

・リフレクション(ふりかえり)の時間をとることで、自ら気づけるようになり学びが促進される。

【事例2】

千葉敦子さん(ジャーナリスト)の詩を取り上げる。千葉さんは、「女は家に」という考えに反発し、世界中を駆けめくって活躍した人だ。癌におかされたが、最後の最後まで若い女性や病気の人たちを励ますエッセイを書き続けた。

彼女のエッセイを英語で読んでから、アクティビティを行う。

Have you ever been discriminated as a boy or a girl?

(今までに、男だから女だからと差別をされたことがありますか?)

男女別の4人グループになって、A3サイズの紙に、言われていやだったことをまとめる。クラス中がにぎやかになり、ほどなくして意見がまとまる。

【男の子側】

- ・男なら赤い色の服を着るな!
- ・男なら泣くな、涙を見せるな!
- ・男はあんまりしゃべるな!
- ・男は台所に立つな!

【女の子側】

- ・女はあくらをかくな!
- ・料理と洗濯ができるようになれ!
- ・女がゲームをするのはおかしい!
- ・大きな口を開けて笑うな など

次にポスターセッションを行う。グループの代表が、訪問者たちに対して簡単に英語で内容を説明する。グラグラ笑い出す男子、「ウッソー!?!」と驚く女子。



訪問が終わったところで、リフレクションを行う。気づきが生まれるように男女混合の8人グループになって話しあう。

今までは、男子は男子の側から、女子は女子の側からしか見ていなかった。今回、両面から見たことによって相手の立場に立って理解しようという気持ちが生まれた。と同時に、男らしさ、女らしさとは何か、差別とは何かに気づけたようである。

ある男子がこんな感想を述べている。

I think discrimination is sad. Men discriminate women. Human beings kill animals easily. People kill people because they discriminate. We have to share only one earth. I think every thing on this earth has the right to live happily.

6 わたしの夢

「~したくなる」ようにするには、自己肯定感(セルフ・エスティーム)を高めることが大切だ。自信がないと、やろうという気にはなりにくい。

日々の授業でナンバーワンを目指すのではなく、オンリーワン(自分らしさ)を意識できるようにしたいものだ。

気づきが必要なのはそのためである。

また、教師と生徒が人間関係を深め、居心地のよい集団ができたときに、はじめて自己肯定感を高める下地ができるのではないだろうか。子どもたちの未曾有の力を伸ばすために、集団の中で気づき合い、学び合い、高め合う手法がもっと研究されるべきだろう。

一人でも多くの子どもがセルフ・エスティームを高められ、元気(empowering)に学校に通って来られるように、今後も授業をグローバルな視点でローカルに取り組んでいきたいと私は考えている。

バックワード・デザインで 生徒が、教師が変わる

中嶋 浩一

1 私の主張

本稿では、「バックワード・デザイン」(ゴールから逆算しながら計画を立てること)の有効性について述べる。実践記録というよりも、ややコラム的な内容になることをお断りしておきたい。

まず、3年生の授業の感想をお読みいただきたい。

● 先生の授業は、吸い込まれてしまうくらい分かりやすく、とても魅力を感じました。ずっと先生の授業を受けていたかったです。

● 先生の授業を一言で言うと「すげえ」です。前より英語が得意になったし、たくさんすることに興味を持つようになりました。先生の授業が受けられなくなると思うと寂しいです。

● 中嶋先生の授業は今までにない授業でした。ペア学習、映画、英語の歌で速読の力や聞く力がぐんぐんついていきました。最初は、中嶋先生のことを信用していませんでした。ごめんなさい。だけど、どんどん点数が伸びて、英語が好きになっていくのが自覚できてビックリしました。中嶋マジックって本当にあるんだなあと思いました。

● 実力テストで、最初20点も行かなかったのに、いつの間にか、35点、36点とれるようになり、本当に驚きました。先生の授業は英語だけでなく、生きていくために大切なことばかりでした。

● 授業でやった、アフリカの子供たちのこと、セヴァンさんのスピーチは、私の人生を変える大きなきっかけになりました。もっと勉強して外国に行き、難民の子供たちに少しでもかかわってあげたいと強く思うようになりました。これも先生のおかげです。もう、そんな先生の授業が受けられないと思うと、とても寂しいです。だけど、もっとたくさんの生徒が先生の授業を受けて私が得たようなことばの素晴らしさをつかんでくれたらいいなと思います。たった1年間でしたが、私は中嶋先生の生徒であったことを誇りに思います。本当にありがとうございました。

生徒の感想は、教師の指導の結果であり、粉飾のない「事実」である。だから、ワークショップ等で、生徒の授業の感想を読んでいただくと、会場の雰囲気が一変する。「一体どんな指導をすれば、こんな感想を書く生徒が育つか。」それを知りたいという好奇心からである。それだけ、生徒の感想は説得力がある。

「変容した」という感想が書けるような生徒を育てたい。そう願って、私は、速星中学校と出町中学校勤務の14年間で10冊のハードカバー「卒業記念英語文集」を作り続けた。それを3年間の総決算(ゴール)

とした。力がついていなければ、質の高いものは書けない。心が育っていなければ、読み手の心を動かすものは書けない。

文集がちょうど「扇の要」になるとすれば、いつでもどのような活動(タスク)を仕組んでおくかを、最初に全体構想としておこななければならない。年度当初に3学期のゴールを決め、それに到達するための2学期の指導を考え、次に1学期の指導を考える。4月の最初の3時間(英語版トリビアの泉)は年度末に、3月の最後の5時間(卒業論文プロジェクト)は年度当初に決めておく。

このように、ものごとを後ろから考えるようになってから、物事の見方が変わった。入学式後の歓迎会では、「授業開きで何をするか」について情報交換をし、授業談義に花を咲かせる。教科の仲間等には、積極的に自分から資料や刺激のあるメールを提供している。昨年度は教科部会で学期の最初にテスト問題を作成した。学期末に全員と個人面接を行った。年度当初に教師から「学習内容・評価方法・到達目標」を示し、生徒にそれぞれどこまで目指すのか「自己申告」させた。そして、学期末に試験やパフォーマンス・テストの得点や学習状況を示すグラフを提示し、4技能(聞く力・読む力・書く力・話す力)で何が伸びたかという状況と今後の課題を具体的に伝えた。加えて、夏季休業中に何を特化して取り組めばよいかをアドバイスした。最初にゴールを設定したからこそできたことである。

2 NHKのディレクターから学んだプロ意識

7月にNHK教育テレビ『わくわく授業』に出演する機会を得た。担当の寺岡ディレクターの姿勢には驚かされることばかりであった。彼も「バックワード・デザイン」で番組を作っていたのである。彼は5冊の拙著やDVD等を見た上で来校された。そして、いきなり「全国の視聴者は、様々な授業テクニックを見たいと思うのですが、私はそんなことは取り上げません。むしろ、ペア学習を通して、人と人のかかわりあいを取り上げたい。できれば、普通の生徒、英語が苦手な生徒、やんちゃな生徒を追いかけるドキュメンタリーにしたいのですが。」そう言いながら、まだ取材も始まっていないのに、いきなり番組の絵コンテ10枚を目の前に差し出された。すでに企画会議にはそれが提出され、通っているのだという。私はびっくり仰天してしまった。確かに、計画はバックワードで立てていくが、授業自体は生徒と共に作り上げていくものである。映像として授業構想が出来上がっていることに少なからず違和感を覚えた。しかし、その後で彼が言ったことには、さらに驚いてしまった。

生徒全員分の写真と名前を用意して下さい。カメラマン2人、マイク2人、そして私が、取材が始まるまでの1週間で全て名前を覚えてきます。授業で変容を見せる生徒の瞬間をとらえたいので、即座に対応しなければな

らないからです。そして、申し訳ありませんが、流れを知っておかなければならないので、今後の10時間分の指導案を書いて下さい。もちろん、収録しない授業の分もです。

27年間教師をしてきたが、10時間分の連続する指導案を書くなど初めての経験である。前時と本時の「のりしろ」をどうするか、できるようになったことをさらにどう発展させるか、ずいぶん悩んだ。寺岡さんに指導案が送れたのは、取材が始まる前日（出発日）のことであった。

教科部会、個人のインタビュー、活動の before & after 等々、9時間（授業は6時間）分の内容が収録された。膨大な量のテープから、分単位で場面を切ってはつなぐという気の遠くなるような作業を繰り返して一本にまとめ、音楽や語りを入れて25分番組にするのだという。つまり、最初の全体構想（始まり、展開、終わりのイメージ）がきちんと出来ていなければ、方向性は見えず、頭を抱えるだけである。やはり、プロはすごい。

3 私塾(中嶋塾)もやっぱりバックワード・デザインで

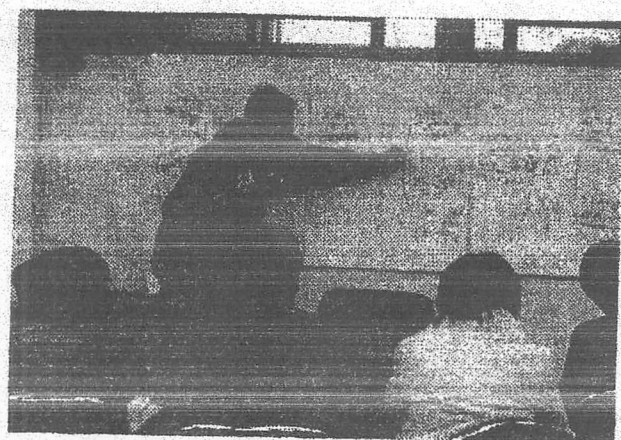
教師生活も残り10年を切った。今まで多くの方々から教えていただいたことを、後輩に伝承していきたい。そこで10月に私塾と全国のメーリングリスト（以下ML）を立ち上げた。MLは、北海道の稚内から沖縄まで多くの方が登録され、常時悩み相談や情報交換等をしている。

また、月に1度、全国から20名の塾生たちが出町中学校に集まってくる。毎回、事前にメールで演習題（レポート）を出しているのだから、かなりハードである。それでも無断欠席はない。新潟、長野、福井、石川、富山の先生方。山形の先生は5時間もかけて来校し、帰宅は真夜中を過ぎる。そんな彼らのやる気に報いるような内容にしたいと、毎回、頭を悩ませているのが現状である。

ここでは3月5日に行われた例会（「こんな授業がしたい！お薦め、私たちのオリジナル・シラバス」）の内容をご紹介します。4月から新教科書になるので、3年間の全体構想をバックワード・デザインで考えてみようというものである。6社の教科書の中から、書く活動、話す活動の「出力型」タスク（言語活動）を全てコピーし、各教室で4～5人のグループごとに考えた。最初に、テーマに基づいて3年の最後の活動を決め、一本の太い幹になるように、2学期、1学期、2年生、1年生の出力型タスクを決めていくという内容である。

最後に、各グループの企画部長、営業部長が中心となって、それぞれの編集方針や内容を英語でプレゼンテーションをして、全体で振り返る。例会後には、メールのやりとりで熱心な討議が始まる。

次に紹介するのは、例会後の塾生の感想である。



● 今回の例会は、中嶋先生が話されていたように、今までで最も頭を使った会でした。しかし、それだけにとっても充実した内容だったように思います。まず、中嶋先生が、3年生の最後の授業で書かせた感想を提示されました。どれも壮絶なものでした。こんなことが書けるものなのか、と圧倒されました。子どもたちの心からの熱い思いが迫ってきました。改めて思いました。中嶋先生のような教育がしたいと…。幹は子どもたちが語る事実の中にこそ存在するのだと。

● 5つのグループのゴールはそれぞれ①生徒に自信を与える②教室内の人間関係を構築する③英語を学ぶ意味を知る④言葉の大切さを知る⑤世界への視野を広げる、でした。私は②の人間関係のグループでしたが、活動中テーマを意識しながら、3年間の活動のつながりを考えていると、いろいろなものが見えてきました。グループの先生方と話をするなかで、いろいろな発見がありました。まさに、自分にとって、ゴールデンタイムでした。

4 今後の課題と展望

次年度から「とやま型学校評価」が始まる。保護者や地域の方々へ示す3つの柱もできつつある。また、今年度は全ての保護者に「カラーの簡易版学校要覧」を配布したが、次年度はA2判の出中の行事カレンダーを配布する。学校にさらに関心をもってもらうためには、学校に足を運んでもらうのが一番である。行事カレンダーの配布は、見直しをもってもらうための発信である。

発信していると、プラス（やる気）のエネルギーが生まれてくる。待ちの姿勢から生まれるのは、負のエネルギー（錯覚や思いこみ）だけである。明るく情報を発信しあう職場にしたいというのが、私のささやかな願いである。

初めと最後で読み手と
どうつながるかが
勝負です。